

## 「統一」と「要求実現」の考え方

たとえば、プロコポヴィチ氏のつぎのような文句を取ってみたまえ、「人民大衆の政治生活の健全な諸条件をつくりだすこと——これが、こんにち左翼をも反政府派をも統一している当面の目標である」。

この文句以上に無内容な、空虚な、欺瞞的なものはなにもない。この空文句には、オクチャブリストも、機敏な「国権派」も同意するであろう。なぜなら、それはなにひとつはっきりしたことを述べていないのだからである。これは空約束であり、むきだしの大言壮語であり、自分の考えを外交術策的にかくすことである。しかし、もし他の多くの自由主義者とおなじようにプロコポヴィチ氏にとっても、自分の考えをかくすために舌があたえられているとしても、われわれはわれわれの義務をはたすように、すなわち、ここにかくされていることをあばきだすように試みよう。慎重を期するため、よりひかえめに、よりささやかに、事例をあげておこう。

二院制度は、政治生活の健全な条件であろうか？ われわれは、そうではないとおもっている。ところが、進歩派とカデットは、そうだとおもっている。自由主義者のこういう見解にたいして、われわれは彼らの反民主主義、反革命性を非難している。しかもわれわれが自由主義者にたいするこのような非難を表現するばあい、われわれはそのこと自体によって、いっそうはげしくすべての右翼を非難しているのである。

ではつぎに、「左翼と反政府派との統一」はどうなるのか？ いったいわれわれは、このような意見の相違から、右翼に反対する自由主義者との統一を拒否しているだろうか？ いや、けっして拒否していない。この問題についての、またこれに類する、すべての**はるかに重要な**政治的自由の問題についての、自由主義者の反革命の見解は早くから、1905年——それ以前ではないとしても——からわれわれにはよくわかっているのだが、しかしそれにもかかわらず、1912年になってもわれわれは、再投票でも、選挙の第二段階でも、右翼に対抗する自由主義者との協定がゆるされるべきであると繰り返しているのである。なぜなら、ブルジョア君主主義的自由主義は、それがまったく中途半端なものであるにかかわらず、農奴制的反動とはまったく別ものだからである。この相違を利用しないということは、まったく拙劣な労働者政治運動というべきであろう。

だが、さきへすすもう。どのように利用すべきか？ 「左翼と反政府派との統一」は、**どういう条件**のもとで可能なのか？ この問題にたいして自由主義者は、左翼が反政府派と不屈の闘争をつづけているかぎり、統一など全然問題とならない、とこたえている。そして自由主義者は自分の考えをつぎのように説明している、要求がひかえめであればあるほど、それだけ協調の範囲はひろく、それだけ統一は完全なものになり、この要求を実現する力はそれだけ大きい。二院制（と……やわらかく言うにはどう言ったらいいか？……民主主義からのわずかな後退）を伴う「どうにか、がまんできる」憲法にたいしては、どの民主主義者も、どの自由主義者も、みな賛成するであろう。それは非常に多数である。だが、もし「純粹の」民主主義を固執すれば、進歩派は脱落するであろうし、多数のカデットを「反撥させる」であろう。その結果、「立憲主義的分子」はばらばらになり、無力になるであろう、と。

自由主義者はこう考えている。だがわれわれの考えはちがう。大衆の自覚がなかったなら、よい方向へのどんな変化もありえない。これがわれわれの基本的な前提である。自由主義者は上層を見ているが、われわれは「下層」を見ている。二院制の害悪を説明することを断念するか、この問題にたいするあらゆる反民主主義的見解との「闘争」をたとえわずかでも弱めることによって、われわれは、自由主義的な地主、商人、弁護士、教授連中を「ひきつける」であろう。——彼らはすべて、プリシケヴィチの実の兄弟であり、プリシケヴィチに反対してなにひとつやることができないのだ。彼らを「ひきつける」ことによって、われわれは、大衆を突きはなしてしまうであろう。——大衆にとっては、民主主義は外交的駆引のための表看板でもなければ見せかけの空文句でもなく、緊要な、切実な事業であり、死活の問題であって、こういう大衆は二院制の支持者にたいして信頼を失う、という意味でも、——また、二院制にたいする攻撃の弱化は、大衆の自覚が不十分なことを意味するが、無自覚な、眠った、不決断な大衆のもとでは、よい方向へのどんな変化も不可能であるという意味でも大衆を突きはなしてしまうであろう。

諸君は自由主義者との論争によって、左翼と反政府派とをきりはなしている、とカデットやプロコポヴィチ一派の諸君はわれわれにむかって言う。われわれはつぎのように答える。首尾一貫した民主主義は、きわめて動揺的な、信頼のできない、プリシケヴィチ支配にたいしてもっとも寛容な自由主義者を、突きはなしている。彼らはほんのひとにぎりである。だがそれ〔首尾一貫した民主主義〕は、いまや新しい生活に、「健全な政治生活」——ただし、われわれはこの言葉を、プロコポヴィチ氏とははるかに異なった、まったく異なった意味に理解している——に目ざめつつある幾百万の大衆を引きつけている。 ……

ところで『ルースキエ・ヴェードモスチ』は「いま、すべての進歩的政党に共通な一つの条項、すなわち政治的自由の実現を要求する条項が、綱領中のその他のあらゆる条項にたいして支配的である」といって、われわれに反駁してはならない。この条項が**支配的**であることが、まったく争う余他のないことであり、神聖な真理であるからこそ、もっとも広範な大衆が、幾百万、幾千万の人々が、半ばの自由と自由とを区別し、政治上の民主主義と農業改革上の民主主義との不可分な結びつきを理解することが、必要なのである。

大衆の関心、自覚、勇気、行動力、決断力、自主性がなければ、どんな分野でも、絶対になにひとつ、なしとげることにはできないのである。

注) ……は本文中の略………は青山の略

第 18 卷 P126~128 『われわれと自由主義者との論戦の性格と意義について』

『ネフスカヤ・ズヴェズダ』第 12 号、1912 年 6 月 10 日

## ポイント

自由主義者の見解にたいして、われわれは彼らの反民主主義、反革命性を非難している。しかもわれわれが自由主義者にたいするこのような非難を表現するばあい、われわれはそのこと自体によって、いっそうはげしくすべての右翼を非難しているのである。

しかし、自由主義者との意見の相違があるからといって、右翼に反対する自由主義者との統一を拒否しているだろうか？ われわれは右翼に対抗する自由主義者との協定がゆるされるべきであると繰り返しているのである。右翼と自由主義者との相違を利用しない

のは、まったく拙劣な労働者政治運動というべきである。

自由主義者は自分の考えをつぎのように説明している、要求がひかえめであればあるほど、それだけ協調の範囲はひろく、それだけ統一は完全なものになり、この要求を実現する力はそれだけ大きい、と。だがわれわれの考えはちがう。大衆の自覚がなかったなら、よい方向へのどんな変化もありえない。これがわれわれの基本的な前提である。自由主義者は上層を見ているが、われわれは「下層」を見ている。自由主義的な人々を「ひきつける」ことによって、われわれは、大衆を突きはなしてしまう。——大衆にとっては、民主主義は外交的駆引のための表看板でもなければ見せかけの空文句でもなく、緊要な、切実な事業であり、死活の問題であって、こういう大衆は非民主主義的な制度を支持する者にたいして信頼を失う、という意味でも、——また、非民主主義的な制度にたいする攻撃の弱化は、大衆の自覚が不十分なことを意味するが、無自覚な、眠った、不決断な大衆のもとでは、よい方向へのどんな変化も不可能であるという意味でも大衆を突きはなしてしまうのである。

大衆の関心、自覚、勇気、行動力、決断力、自主性がなければ、どんな分野でも、絶対になにひとつ、なしとげることにはできない。だから、わたしたちは目ざめつつある幾百万の大衆を引きつけるために〔首尾一貫した民主主義〕でなければならない。